

ソ連地理学の現状をめぐっての議論：「文学新聞」 紙上の論文を中心に

小野，菊雄

<https://doi.org/10.15017/2244128>

出版情報：史淵. 100, pp.313-334, 1968-03-01. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



ソ連地理学の現状をめぐっての議論

——「文学新聞」紙上の論文を中心に——

は　じ　め　に

小　野　菊　雄

「単一的」もしくは「統一的」地理学の確立、すなわち地理学の諸分野をいわば総合したような部門の確立が必要か否かをめぐって、ソ連地理学界でおこなわれている議論については筆者も若干紹介したことがある。^①ところで筆者の紹介以後も、この問題に関連する論文をソ連の地理学誌上に時折みることができたのであるが、更に最近、ソビエト作家同盟の機関紙「文学新聞」(Literaturnaya gazeta)に掲載された一連の論文、すなわちヴェ・ア・アヌーチンの「困ったこと」という一文にはじまり、ユ・ゲ・サウシキンの「地理学の今日と明日」という一文に終るまで、ソ連地理学の現状をめぐって発表された六つの論文に眼を通すことができた。この場合、「単一的」地理学確立の熱心な主張者であるアヌーチンが口火を切ったということは、当然その問題が中心になるのであるが、今度はそれに加えて、ソ連科学アカデミー地理学研究所(以下地理研と略す)の現状について議論が戦わされており、それが今まではあまり表面に出なかった問題でもあるだけに、我々がソ連地理学の状況を知る上にも、また一つの新しい参考資料になるかと思うのである。

そこで筆者は、従来の紹介を補強するためにも、「文学新聞」紙上の六つの論文とそれに関連して「全連邦地理学会通報」一九六五年第六号に発表された無署名論文について、以下に若干紹介しておきたいと思う。ただ、これらの論文はかなり長文のものであり、その上この小文では紙数が限られているので、非常に概略的な紹介に終ってしまい、各論者の意を十分につくせないものになるかもしれないことを恐れるものである。なおこれも紙数の関係から、文脈や表現などの点で各論文にいささか手を加えた上で、各々の主張をいわば直接話法的に記したことをあらかじめご承知いただきたい。

一

さて、「文学新聞」一九六五年二月一八日号には「科学の中の『シンデレラ』』という見出しで、モスクワ大学地理学部ヴェ・ア・アヌーチン助教授の「困ったこと」という論文が発表されたが、アヌーチンは次のような見解をのべている。

数学・物理学・化学などが実際面に大きな貢献をしているのに比して、地理学は依然として記述的段階にとどまっております、まさに「科学の中のシンデレラ」すなわち「継子扱い」の状態にある。^⑤ところでその原因は何か。一つには地理学各部門の発展に比して一般地理学理論の研究が不十分なること、そして地理学者自身がそれを正常として、専門化の時代には、地理学のように幅の広い科学は必然的に消滅すると考えていることにあり、他の原因としては、自然に対する主意的見解が広く普及していること、すなわち「社会発展への自然の役割は取るに足らぬほど小さい」とか「人間の活動はすべて社会機構が決定する」という見解が広く普及していることが考えられる。

ところで、筆者が以前紹介したように、アヌーチンは社会発展上での地理的環境の役割は大きいと言い、地理的環境と社会との相互作用の研究を重視し、そこから「単一的」もしくは一般的・総合的地理学の必要性を強調するのであるが、そうした彼の考えに基づいて、右のような地理学の立ち遅れの原因をあげたのである。さて、彼は更に次のように言

う。

マルクス主義的世界観に基づく真に科学的な総合的地理学理論が形成される前提は、既に一九二〇年代のソ連地理学界に存在していたが、それはやがて「個人崇拜」と科学分野でのその現われである独断的歪曲によって崩壊してしまった。それ故に、総合的地理学理論創造のためには、地理学における独断的歪曲の現われ、すなわち「ソ同盟共産党（ボルシェヴィキ）歴史」の中で地理的環境を社会発展と切り離し、もっぱら自然的要素とのみ考えているスターリン的定義^⑥を批判する必要がある。しかし、今なお若干の地理学者はこの定義をその理論的基礎として、それによって自然科学と社会科学の間に越え難い壁を立て、自然地理学を含む地理学の領域に経済地理学を入れようとする考えを「反乱だ」と言い、自分たちと異なる理論をすべて「反地理主義」（anti-geographism）ときめつけ、結局、地理学を「解消」してしまおうとしている。しかもこうした考えはいわば「不死身」のものを持っているのであるが、それはソ連の主要な地理研究機関の指導者たちが、地理学のある狭い分野で有益な研究をしているが一般地理学の発展には全然関心のない人たちだからであり、そのため特にこうした研究機関では地理学の「絶滅」がみられ、その一典型として地理研があげられる。

地理研では研究テーマが年々地理学的でなくなってきたことは周知のことであり、特に経済地理学や景觀学などは強い迫害をうけ、たとえば経済地理的研究への費用支出の割合は低下するばかりで、今や地理研の経済地理学部門は「解消の瀬戸際」に追い込まれている。そしてこうした状態は、地理学をすべて自然地理学に帰してしまうような論文を発表したことのある地理研所長イ・ペ・ゲラシーモフの考えと無関係ではないのである。^⑦

総合的地理学部門の確立は、今日なおこれらの人々によって、「環境決定論に基づくブルジョア的単一的地理学の復活だ」とか「社会的法則と自然的法則の混同だ」として非難・妨害されているが、結局こうした状況が各地域の土地の経済的評価をしないまま、ある「流行」作物を全国に普及しようとして農業に大損害を与えたり、農業用地として最適の广大

な土地を建築用地にしてしまつたりというように實際面に様々の有害な結果をもたらしているのである。こうした損害を防止するためには、自然と社会を結びつける一般の・総合的地理学の確立が必要なのであり、それには学者個人またはグループがその科学を独占する権利を認めず、お互いに自由な意見交換と科学的批判を進めて、研究のための真に創造的な雰囲気確立することが重要なのである。

「困ったこと」と題するアヌーチンの論文の趣旨は以上のようなものである。

二

さてアヌーチンのこの論文をうけて「文学新聞」一九六五年三月二五日号には、デ・アルマンド教授の「しないようにしよう！」という論文が発表された。^⑧

「あわれつばい言葉を口にしないようにしよう。現在、健在である科学の死を泣き悲しまないようにしよう。そんなものが存在しないようなところで、諸々の欠点の原因を探し求めたりしないようにしよう。私はシンデレラすなわち地理学の墓でのアヌーチンの泣き声、二月一八日の彼の論文に響き渡っていた彼の泣き声をさしている」という文章ではじまるアルマンドの論文は次のように主張している。

国民経済面での地理学の利用度が不当に低く、そのため水資源の無秩序な利用など大きな損害が出ているが、地理学者の参加がそれらをより合理的に解決できるということなどではアヌーチンと同意見である。ただ、アヌーチンは「反地理主義」を地理学蔑視の理由にあげているが、そのような地理学への敵意みたいなものではなく、あるのは「非地理主義」(ageographism)とすべきもの、すなわち最近十年間、国民経済の問題を扱ってきた若干の人々や研究機関の「地理学的無知」だと言う方が正しいだろう。更に地理学の立ち遅れの他の理由としては、五〇年代はじめの自然地理学をめぐる

激論のあと地理学者たちが理論上の議論に疲れ、「理論や方法論を論ずることはするがしこく小才をふりまわすことだ」とかあげくのはては「理論などはインスピレーションの産物だ」とまで考えるようになった状況があげられる。こうした状況が、俗悪な「地理主義」に落ち込む恐怖心から心ならずも社会発展上の自然の役割を過少評価するような卑俗な「経済主義」へと地理学者を追い込んだのである。

しかし、理論研究の強化はアヌーチンの言う「単一的」地理学の方においてすべきではない。何故ならば、科学はその成長の必然的にして有益な結果として分化していくのであって、地理学も古代から様々の分野に別れてきたが、それによって地理学は消滅することなく、むしろ科学としての広さと意義を増大させているのである。また、実際面からみても「単一的」地理学は何ら役立たないものであり、現に長い議論の間にも、「単一的」地理学支持者たちは反対論者たちを屈服させるようなモノグラフを一つたりとも創り出していない。要するに自然地理学と経済地理学の方法は異なり、また実際面からの両分野への要求は非常に分化されたものであって、結局、それらの諸要求をすべて同等に満たすことができないほど堪能な専門家を養成するのは不可能である。確かに科学の分化と共に総合も必要であるが、それはたとえば様々の専門分野の共同研究として実現できるのであり、そこから諸分野の接点などに特殊な科学が発展してくる可能性はある。ただし、それは自然地理学や経済地理学と並列するものであって、両者を包含するような科学ではないであらう。

また、アヌーチンは地理学の立ち遅れに関しての重要な現実的原因、たとえば数学的器具や物理学の実験の地理学での応用の度合が遅いこと、農学・土地森林改良・水工学など隣接諸科学の基礎を会得することへの地理学者たちの決心が不十分なること、教育面での地理学の驚くべき停滞などを忘れている。それに、彼がゲラシーモフが土壤地理学の代表者で総合的地理学の代表者ではないことを立ち遅れの一因にしているのは全く遺憾である。

ソ連地理学は重大な弱点を持つてはいるが、事態はそれほど悪くはなく、この「シンデレラ」が数学などに基礎をおく

精密科学という「王子」に嫁ぐ期待は十分にあり、現に地理研やモスクワ大学など大学の地理学部では、水利・土地改良・土地評価などの研究が効果的におこなわれているし、アヌーチンが「解消の際」にあるとした地理研での経済地理学もソ連や外国についての多くのすぐれた研究をおこなっている。結局、「きゆうくつな短靴」すなわち人間が十分な知識や技術なしに介入したり、その資源を不経済に浪費したりすることへの自然の仕返しであるところの思いがけない二次的事態を予知し、それを克服するという仕事は、地理学という「シンデレラ」にのみびつたり合うのであり、そのことは経済・計画諸機関がしばしば驚きをもつて確認しているのである。いずれにせよ、どんなにひいき目にみても、自分が昨日の欠点を批判しているのだということに有能な一学者が気付かないのは残念だが、混乱に落ち込むことなく、事実の正確な報道を遵守しつつ、今日の欠点を批判することは必要である。

三

ところで、アヌーチンとアルマンドの論文に続いて「文学新聞」一九六五年四月二九日号には、アヌーチンに批判された地理研所長ゲラシーモフが「文学新聞」編集部に寄せた書簡が「地理学は消えうせてしまったのだろうか」と題して発表されているが、ゲラシーモフは大体次のようにのべている。^①

近年地理研では地理学の新しい方向が絶えず強化され、昔の記述的方法から、自然資源の総合的利用や生産力発展の研究、自然改造についての科学的予測研究など地理学者の眼前にある様々の問題に対する活動的で建設的な研究への全面的転換がおこなわれている。それは一九六四年の第四回全連邦地理学会大会やその後の科学アカデミー幹部会でも地理研の研究課題の基礎として認められたのであつて、それを「地理学の絶滅だ」とするアヌーチンの考えには全く同意できない。

また、地理研の経済地理学関係の成員も決して減少してはいない。もちろん、その発展はまだ不十分なものであつた

が、自然条件や自然資源の経済的評価の諸問題・他国における自然資源開発や生産力発展の経験についての研究などを考えれば、地理研の経済地理学者の研究は最も重要だと言うべきである。ただ、経済地理的研究の課題が複雑化してきたことや新しく生まれた研究機関（生産力研究所、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ関係の諸研究所など）で経済地理的研究に関連する問題が増加してきたことなどから、科学アカデミー幹部会がその経済部門に対して経済地理的研究を委託するようになったことに注意すべきであり、これは経済部門による経済地理的研究の強化と経済学者と経済地理学者の関連の強化を考慮した措置なのである。そのほか地理研での景観学も地球物理学・地球化学・サイバネティクスなどの方法による新しい研究が進展しており、また、地理研全体から成る共同研究もおこなわれ、ソ連や外国の自然資源や経済地理に関する多数のモノグラフが地理研から発表されている。

このようにアヌーチンの批判に反論を加えたゲラシーモフは最後に次のように言う。

何故アヌーチンは地理研の研究をそのような偏見をもって解明し、地理研の今日の特色である新しい研究方向を徹頭徹尾黙殺する必要があったのだろうか。それは彼の「単一的」地理学の主張を補強するためにほかならない。しかし、彼の見解は地理学についての古臭い観念の上に樹立され、地理学各部門を地理学全体に敵対的に対比させようとする誤まった考えである。今日のあらゆる科学における分化傾向を無視してはいけない。総合的理論が発展する全般的水準は基本的な各部門分野の発展にかかっていることを忘れてはいけない。また、科学研究者が科学の対象と課題についての自分の考えをのべることは誰からも禁止されるべきではなく、むしろ奨励されるべきであるが、ただ、議論に際しては、諸事実の説明においてその真实性を堅守することが必要なものであって、残念ながらアヌーチンの論文ではこの規律が破られており、この点で「文学新聞」の読者たちはだまされていると言える。

四

しかし、「文学新聞」一九六五年五月二〇日号にはこのゲラシーモフの主張に反論を加えた論文が発表された。それはゲラシーモフと同じ地理研の所員であるヴェ・エム・ゴフマン、エム・ベ・ゴルヌンク、ヴェ・ベ・コワレフスキーの三人の共同による「制服の名誉のためではなく」と題するものであるが、その要旨は次ぎの如くである。^⑧

地理学は自然も社会も対象にしていることから他の自然科学よりも広く複雑で、法則性の発見なども一層困難になり、結局、他の科学から取り残されたのであるが、こうした立ち遅れを克服する道としては、一つはアルマンドが言うように数学的方法など精密科学の成果を利用して、従来の「より大きい」「より小さい」などという「大凡の判定」を改めるようにすることが必要であろう。そのほかには理論的發展の強化が必要であるが、全くこの数年間のソ連地理学界での理論に関する議論は、術語上の問題や「科学的無知」とか「反マルクス主義」という相互非難にすり替わり、お互いに「引用文の棍棒でなぐり合っている」ような状態で、科学上の議論が具体的性格を持ち、実践によって裏付けられていなければならないということが忘れられてしまっている。

しかし、意見の相違はあっても、地理学の強みは「地域についての総合的研究」にあるという点では大体一致しており、またこうした研究に地理学が実際面に貢献できる第一の可能性があり、それがまた地理学の理論的研究のための実践的基盤につながっていることにも疑いはないのであるが、ただその総合的研究の中で何を中心とみるかで人によって意見が違ってくるのである。この場合我々は、生産力の発展・配置の問題を伴う地理的科學の中でそれに最も直接的に関連している経済地理学を中心に考え、そこから経済諸法則についての知識を持ち、ソ連の自然資源を増加させることに努力している経済学者を地理学という「シンデレラ」の婚約候補者の一人にあげたいのである。すなわち経済地理学を中心とす

る地理学は、経済科学との密接な同盟によつてのみ重要な国民経済上の問題の解決に参加でき、また今よりも著しく大きく貴重な貢献をなしうるのである。

ところで、自然資源の経済的評価の研究や資本主義国での経験に対する批判的研究などは従来もおこなわれてきたが、それは明らかに不十分である。そのことは、主意主義あるいは生産力発展・配置の理論や精密な経済的計算への蔑視がまだ克服されていないこと、また自然地理学が経済地理学よりも優越した状態が正常とみられ、時にはソ連地理学の発展の正当性を示すものと偽り称せられていることなどに関連していると思われる。巨大な空間を有するソ連では、確かに自然地理学も大きな地位を占めるべきではあるが、それにしても科学と計画経済に基づいて自然資源の合理的利用への大きな可能性を持つこのソ連で、当然中心となるべき経済地理学が何らの権利も持たされていないのはどういうことだろうか。

こうした自然地理学の「伝統的」な優勢は地理研において特に明瞭であるが、我々は長年その研究員であり、もし「制服の名誉」を守るのならば、地理研の若干の側面に触れるべきではないであろうが、しかし我々はゲラシーモフやアルマンドと異なる意見を持つており、また地理研のようなソ連の中心的な地理研究機関がソ連地理学全般の状態を少なからず規定しているだけに、この際「制服の名誉」などは重要ではないと思うのである。ところでゲラシーモフさえも地理研の経済地理学の発展は「不十分であつた」と認めざるをえなかつたのであるが、我々には彼の表現はまだ手ぬるいもので、たとえば「不十分であつた」ではなく「不十分である」と書くべきである。また、地理研の十二の部局のうち経済地理関係はわずかに三部局、おまけに農業・工業・交通などの部局は皆無であるということ、^⑩ソ連や外国の経済地理的研究をおこなっている諸部局の全成員数が氷雪分野一部局の全成員数と同じであること、この十年間に地理研での経済地理学者の割合は二五%から一八%に減少したことなどは、地理研における経済地理学の発展の不十分さを示しているが、こうした地理研の状態への批判はかなり以前からあつたのであり、今度のアヌーチンによる批判もその一つの現われである。

結局この問題は科学アカデミー幹部会および科学アカデミー経済学部門で特別に審議され、両者において自然資源や自然改造の研究・地誌における経済地理的研究・産業や交通の経済地理的研究など地理研における経済地理的研究の発展・強化の重要性が確認され、そのための具体的・組織的措置をとるべきことが決議されたのであるが、しかし、ゲラシーモフが今度の論文に地理研の経済地理学の状態を平穩無事な調子で描き、その研究方向では自然資源と自然改造の研究にしか触れず、産業・交通など他の研究を黙殺してしまっていることは我々にやり切れない思いを抱かせるものである。

更にゲラシーモフが他の諸研究所に経済地理的研究を委託しうるかのように言っているのも問題である。すなわちこれら諸研究所の任務にはそうした研究は入っていないのに、ゲラシーモフはあたかもこれら諸研究所に地理的実体があるかのように言っているのであり、それはまた一九六四年末に彼が地理研を「自然改造研究所」に変え、経済地理的研究はそれに何の関連もない諸研究所に引き渡そうとして作成した「研究所再編案」を思い出させるものでもある。^⑩

要するに地理研首脳部の経済地理学への態度に根本的变化がない限り、経済地理学部門の発展は不可能である。また今日、経済地理学に関連する多くの課題は計画機関などで解決されているが、しかしこれらの機関は地理研に強固な基礎を持っていない。実際面に援助を与え、実践上に存在する問題への深い理論的研究をおこないうる強力な経済地理学中心は、やはり地理研に存在すべきであり、それは地理研所員一同が創りあげねばならないものであり、また創りあげうるものである。そして、こうした経済地理学の強化は地理学全体の運命に影響を与えていくであろう。

五

さて、つづいて「文学新聞」一九六五年六月三日号にはイ・ザベリンの「地理学はどうしたのだろうか」という一文が掲載されたが、ザベリンは大体次のようにのべている。^⑪

一九五〇年三月三十一日の新聞「文化と生活」に当時の所長ア・ア・グリゴリエフの下に活動していた地理研の仕事を批判し、いわば記述的地理学への復帰と理論的問題に対してくどくと言われないことを呼び掛けた、正確には時折命令したところの「生活からの遊離」という論文が掲載されたことがある。しかし当時グリゴリエフは、地理研の援助の下に「生命発生圏」(biogenosfera)の研究、すなわち人類がそれを舞台にして生まれ発展し、またその法則性を認識して大規模に統制しうる単一的自然的統一体の力学と発展法則を解明し、それを統制する道を見出すために自然地理的プロセスについての理論的創造を試みていたのであって、それは今世紀初めに地球とその住民についての記述を完成してしまつてからは、科学の中で「継子扱い」になつていた地理学を発展させる一つの動きだったのである。もちろんその研究には公正な批判を必要としたが、しかし「行政的禁止」措置は必要としないものであつた。けれどもその後、古いものが新しいものへの戦いを開始し、それを「行政的に禁止する」という形で勝利を収めるという事態、論文「生活からの遊離」の主張にみられたような事態が訪れたのである。つまり、五〇年代はじめに地理研の新しい所長になつた格拉シーモフがおこなつた発言は、学問上での彼の反对者たちに困難な時節がきたと感じさせたのであるが、以後十五年間、客観的状態は決定的に変わったのに、地理学での主観的状態はあいも変わらずぬままでであり、たとえばソ連における二つの重要な地理学誌すなわち地理研と地理学会が刊行する雑誌の編集長格拉シーモフとエス・ヴェ・カレスニク^⑧が、地理研とその所長へのどんな批判も事実上削除してしまふような態度をとり続けているという状態なのである。

この十五年間、地理学においては何が良くなつただらうか。一九五七年の人工衛星打ち上げの際に格拉シーモフは「我々の研究所はその活動範囲を強力に拡大しなければならない」と言つたが、それはそのまま言葉としてとどまつてしまつており、さきの「文学新聞」紙上の格拉シーモフの発言も地理研の急速な変化への期待を何ら与えるものではなかつた。

ところでアヌーチンの「単一的」地理学であるが、彼の理論は社会的歴史的实践による裏付けがないために非常に弱

く、また彼は「社会の発展と地理的環境の発展は共軌的におこなわれる」などとしているが、もしそれを認めるならば、「ロシア人は気候暖化のおかげで第二次大戦に勝利した」ということにも原則的に同意しなければならなくなるではないか。どうやら今まで「単一的」地理学理論の基礎としてきた本質的な方法的命題に対してもっと慎重にすべきしい分析をする必要があるが、アヌーチンの構想は以前グリゴリエフが試みて失敗し、のちにその誤りを認めたところの仮説、すなわち自然地理のプロセスと経済地理のプロセスを単一地理のプロセスに統一しようとした考えにきわめて近いと思われる。しかし、過去の誤りを繰り返す必要はあるまい。その誤り一つ一つに長い年月を費やしているではないか。

六

ところでアヌーチンの論文にはじまった「文学新聞」紙上の議論は、一九六五年六月一七日号に掲載されたモスクワ大学地理学部ユ・ゲ・サウシキン教授の「地理学の今日と明日」と題する論文で一応終るのであるが、サウシキンの見解は次ぎのようなものである。^⑩

「文学新聞」紙上の議論には既に久しくソ連の地理学者を心配させている事柄がのべられているが、ただ、地理学の実際の問題を考えず、遠い前方を注視したくないような書きぶりで、地理学の現状に満足し、地理学上の企画や様々の傾向における失敗に対して何らの責任も認めていないような格拉斯シーモフの論文だけは例外である。実際面の要求からの地理学の重大な立ち遅れについては、地理学者以外には誰にも責任はないのである。

ところで歴史的にみればソ連地理学は社会主義社会建設に多くの貢献をしており、今日でも人々の活動の中に確固たる位置をえているが、しかしそれでもなお、他の科学や様々の課題からみれば非常に遅れた状態にある。このような地理学

を發展させるためには、地理学の強みは空間的見地から社会と自然の相互作用や自然的・技術的・経済的プロセス相互の関係を研究する科学であるということ、すなわち自然科学と社会科学を結ぶ最も重要な「橋」の一つだということにある点を考え、しかも自然と社会の相互作用における指導的「側面」は社会にある以上、当然、地理学の中でも経済地理学を指導的位置におく必要があるのである。ただ現在モスクワ大学地理学部でも十四講座のうち経済地理講座はわずか三つである^⑧というようにソ連の主な地理研究機関での経済地理学は多数の自然地理学部門でみえなくなっている状態であつて、こうした重要な事態は地理学における指導的な人たちの間違つた企画・傾向などにより惹き起されたものである。

また経済地理的問題といつても様々の側面があり、それ故に自然地理学者、地図学者などあらゆる人々の参加による問題の総合的解決が必要なのであつて、経済地理学者はいわばこの「地理オーケストラ」の「指揮者」なのである。いづれにせよ、ソ連地理学發展のために、経済地理学へ重心を移すような方向転換は必須のものである。

更にまた、地理学の三部門すなわち自然地理学・経済地理学・地図学自身がきわめて分化してしまい、ある部門の専門家は他の部門の専門家の研究を理解できないと地理学者たちは訴えているが、その存在の意義が「総合性」にある地理学にとつて、これは「死に等しい」状態であり、だからこそアヌーチンの言うような地理学統一の理論が必要なのである。これに對して一部の地理学者たちは「單一的ブルジョア地理学への復帰だ」とか「自然法則と社会法則の混同だ」とか叫びながら、様々の問題の総合的解決に反對しているのであるが、誰も無限のものを把握することはできないし、今日、地理学の分化も必須である以上、アヌーチンの理論が古い時代の未分化の單一的地理学への復帰ではないことは明瞭である。実際面からも科学の分化の動きに総合性を加えるような変化が要求されるのであつて、たとえば経済地理学と気候学の接点に経済気候学、農業地理学と土壌学の接点に土地評価・利用理論などという将来性のある新しい科学が形成されているのであり、地理学としてはこうした新しい総合的方向の専門家を養成せねばならず、また地域研究についても自然地理も

経済地理も専門的に知っているような地誌学者が必要なのである。それから現在のソ連の地理学誌は、統一した目的で結合されておらず、そのためお互いに何らの共通点もない諸論文が並んでいるといういわば奇妙な「文芸作品集」のような状態であるが、これでは「統一ある地域についての統一ある知識を与える使命を有する地理学」とは言えない。つまり「レンガの堆積はまだ建物ではない」のであるが、それを「建物」にするためには総合的地理的研究についての整然とした総合的グループ体系の組織化が必要であろう。

また、数学的・機能的連関と依存や空間的システムの模式創造のために数学的方法を地理学研究にとり入れるべきであり、「そうなる」と地理学者は本格的に専門を変えねばならぬのではないか。皆が皆これに進まなくてもいいのではないか」という意見ももつともであるが、しかし、この方法なしには地理学者の前進は既に不可能だということも明白である。

更にソ連国民経済計画の作成・遂行にはあらゆる自然・労働・物質的資源についての全面的認識が必要であり、従ってそれらに対する経済的評価を伴ない、しかも新しい鉱物産地・新しい集落・道路・工場・その他のデータが常にそこに映し出されているような写真などによる「土地台帳」が必要である。これに基づいて資源利用の長期的予測をおこない、経済計画を改善しうるのであるが、こうしたことが常におこなわれ、ソ連の資源について考慮し、不合理な資源利用などを予防するためには国家的な地理部局が必要であろう。そしてこの国家地理部局はソ連地理学の発展に大きな役割を演じ、地理学を実際面へ一層密接に結びつけるであろうし、それによって、地理学者が得たあらゆる新しい知識の「レンガ」は将来の建物の建設においてその持ち場を見出すようになるのである。

サウシキンの見解は大体以上の如くであるが、この論文につづいて「文学新聞」編集部による一文が掲載されている。

それによると、議論の過程において様々の反響があつたが、そのうち圧倒的多数の人々は實際面からの地理学の立ち遅れを克服することは焦眉の問題だと言ひ、そのためにはある人は地理学の総合部門の發展が、ある人は数学的方法やサイバネティックスの導入が、ある人は地理教育の強化が必要だとしているが、他の一部の人々はソ連地理学の現状に対するアヌーチンの評価や「単一的」地理学の考えに反対する見解を寄せてきたとのべている。^⑦そしてこの問題は既に地理学誌上で議論されてきたが、それに対する広汎な世論の注意を喚起することが「文学新聞」の任務であつたとし、ただ残念ながら様々の批判をうけた地理研からの公式回答をまだ受け取っていないとのべ、更に、編集部がその本質的立場を同じくする今日のサウシキンの論文によつてこの討論を終えるが、すべての関係組織、何よりもソ連科学アカデミーがこの議論の過程で提起されている問題に慎重に対処されんことを期待するとしてその一文を結んでいる。

七

このような「文学新聞」紙上の論文に対して、「全連邦地理学会通報」一九六五年第五号には「『文学新聞』における地理学上の討論に関して」と題する長文の無署名論文が發表された。この論文は恐らく地理学会会長エス・ヴェ・カレスニクが書いたものと思われ、しかも無署名ということは一応学会の公式見解とみられるのであるが、それはともかくとして、そこには大要次のような見解がのべられている。^⑧

かつては地理学の意義を数百万の大衆に説明してくれたこともある「文学新聞」も、今度の場合は奇妙なことが多い。すなわち、第一に発端についての何の説明もなく討論に入り、しかも地理学者は今日まで何に従事すべきかを知らないかのような印象を大衆の中に作りあげようとしたが、これは明らかに誤りである。何故ならば、ゲラシーモフ以外は誰も触れなかったが、既に一九六四年の地理学会第四回大会で総合的地理研究の發展・自然資源の経済的評価・精密科学方法の

定着化などが決議されているのである。第二に、議論を批判的に、しかしおだやかにはじめないで、地理学は記述的段階に停滞し、科学としての存在権利を失っているというアヌーチンの破壊的論文によつてはじめたことである。地理学者たちは、アヌーチンのこの主張が彼の「単一的」地理学理論を補強するためだということを知っているが、「文学新聞」の読者たちはそうしたことは全く知らないのである。第三にアヌーチンへの反響が大きく、約三〇人が意見の発表を希望したが、「文学新聞」は急いで「堤防」を作り、新聞は四カ月に四八回発行されたのに、発表した論文はわずか六つ、しかも討論を不意に打ち切ったのである。おかげで学会幹部会の委託をうけた学会々長の論文は発表されなかったのであるが、既に百二十年間も地理学研究を唯一の任務としている社会的組織を地理学上の討論に参加させないでいいということがどうして言えるのだろうか。第四に討論は地理学そのものについてであるべきなのに、途中から地理研批判が中心になってしまったことである。確かに地理研は重要な地理機関ではあるが、しかしソ連地理学のすべてを体现してはいない。他の研究所、大学の地理学部、地理学会の各支部でも様々の研究が發展しているのである。また地理研については科学アカデミー幹部会が検討を加え、建設的な決議を採択している。第五に諸論文の比較評価もなしに、編集部が機械的に同調したところのサウシキンの論文で討論を終えたことである。そのサウシキンの見解はアヌーチンと同一のものであり、結局、討論は「単一的」地理学の宣伝にはじまり宣伝に終わったのである。もちろん編集部は地理学者から成り立っていないだろうから、編集部だけに責任を負わせるものではない。恐らく相談をうけた「顧問たち」が自分たちへの信頼を悪用して、討論を自己の裁量と好みに従つて「標本化しながら」、偽りの命題を「文学新聞」に提起したと思われるのである。以上のようにのべたあと、この論文は「一方的に調整されてはいるが、正確な確認やすぐれた見解もみられる」として、討論そのものについて次のように主張している。

実際面からの経済地理学への要求は益々大きいものがあるが、ただ経済地理学に「指揮棒」を渡すことについてのサウ

シキンの見解は少し単純である。というのは、「指揮棒」はいわば重みのある成果によって獲得すべきであり、従って、経済地理学部門の割合が小さいなどというのは重要ではなく、小さくても実際的な問題に従事しているならば、当然、中心的地位を占めうる筈なのである。それから国家地理部局は必要であり、それは地理的研究の裂け目を埋め、研究諸結果の実際面への定着化を促進しうるであらう。

確かに今日、ソ連地理学は国民経済の要求に間に合わなくなっており、それは地理学の複雑さ、地理的研究計画や資料の不十分さ、実際面の活動家たちの地理学軽視などによるものであるが、それを地理研究機関に専門の狭い地理学者がいるからというところに原因を求めるのは誤りであろう。またアルマンドは理論的問題に対する「疲労」をあげているが、地理学誌上や地理学関係会議では理論上の議論は常に展開されている。更にアヌーチンは総合的地理研究が「理論的禁制」をこうむったかのように言っているが、多分彼は第四回大会が総合的研究の強化を決議したことを誰も知らないと思っているらしい。それに彼は「個人崇拜」や党史における地理的環境の定義への地理学者の「無批判的」態度を口実にしているが、党史や「自然改造計画」からすれば、スターリンは「社会が自然に影響を与え、それを本質的に変化させる」と考えと共に「地理的環境は人類社会の発展に影響を与える」とも考えていたのではなからうか。^⑧

アヌーチンやサウシキンの考え方は抽象的で、その理論に基づく具体的成果もなく、決定的な論拠を創造・提起することもできない。それでいて、「事実と観察の敘述」という重要な一側面として記述的性格を残してはいるものの、諸事実の総合・現象の比較と解釈・原因と結果の探求・諸関係や諸法則の発見・理論的体系づけなどを明確にその特徴としているソ連現代地理学を、「記述的段階に停滞している」とするのは、彼らがわざと目を閉じて現代の傾向を見ようとしていないことにはかならない。

我々は、未分化の地理学の漸進的發展の過程から形成されてきた地理的科学のシステムというものを認めるが、この場

合、システムの各成員は自身の研究対象を持ち、システムの統一は各成員間の密接な相互関係として理解するのである。要するに地理学には、自然的なものにも社会的なものにも共通の研究対象は存在しない。何故ならば、同時に自然法則・社会法則・その他の法則すべてに沿って発展するような物質の対象はこの世界には存在しないからである。確かに実際面からは様々の科学の総合を要求するが、しかし、これらの科学を一つの科学に強制的に合同させるような作りものの理論の創造を決して要求しはしない。「単一的」地理学すなわち地理的「一元論」は、あらゆる地理的科学的「プロクルステスの寝台」に押し込めようとし、地理的環境を「自然的・社会的条件の混合物」とし、この「混合物」をその諸々の構成分子に等しく固有の法則、すなわち決してどこにも存在しないような法則に隷属させようと努力しているのであり、我々がこうした考えに同意できないのは当然のことである。

もちろん、地理学者は自己の科学の欠点に責任を感じており、それ故にこれらの欠点を軽視しはしない。しかし、それらの欠点を誇張する必要はない。何故ならば、過大評価は過少評価同様、科学の前進をゆがめるからであり、従って、地理学の「崩壊」とか「滅亡」などという根拠のない「騒ぎ」は、実際的問題への地理的研究による解決を助成しはしないのである。その意味でも「文学新聞」での討論は地理学者たちには全く何も与えなかった。また一般の読者にも地理学の複雑な構造・豊かな内容・その意義についての明確な知識を形成させることはできなかった。更に実際の活動家たちが今度の討論に感動して、あたかもその創造者たち自身が、どんな小道をみつけれ出せばいいのかわからないまま密林の中で迷っているような「遅れた」科学に知恵を借りにいくような興味を起すことも恐らくないであろう。

おわりに

以上が「文学新聞」紙上の六つの論文とそれに関連して全連邦地理学会誌に発表された論文それぞれの要旨であるが、

規定枚数をかなり超過したものの、それでもなお非常に概略的な紹介に終ってしまつたようである。しかし、ソ連地理学の持ついくつかの問題点を各論者の主張から少しはくみとつていただくことができたのではないかとも思うのである。

要するに、「単一的」地理学の必要性をめぐる意見の相違は依然としてきびしいものがあるけれども、実際面からみた場合、ソ連地理学は立ち遅れているということでは大体意見が一致しているように思われる。ところでソ連の場合、科学が実際面すなわち社会主義建設に寄与すべきことは当然のこととして考えられるのであり、その点で立ち遅れているとなると地理学者たちもこの問題を真剣に考えざるをえないのである。そこでその立ち遅れを克服するために、各々の専門分野を基礎にして地理学の様々の部門・側面の強化の必要が叫ばれ、更に科学アカデミー地理学研究所への批判も出てくるのである。この地理研批判に関連して出ている自然地理学の「優勢」ということであるが、確かにソ連の地理学誌などを見ると自然地理関係の論文が圧倒的に多い。しかしそれは、ソ連の自然地理学が革命前の成果を基礎にして、革命後もすぐれた研究を生み出し、それがそのまま社会主義建設にも大きな成果を残してきた一つの現われではないかと思う。もちろん、ソ連の経済地理学も多くの業績を残しているのであるが、シベリア開発など当面の実際的問題を考えれば、それを自然地理学の成果に一層密接に関連させる形で発展せしめることは最も重要なことであり、それ故に、自然地理学の「優勢」の問題はともかく、ソ連における経済地理学の強化が益々必要であることはいうまでもないであろう。ただ、経済地理的研究を実際面に一層反映させようとするならば、経済科学との関連が必要になると思われ、そこから経済地理学を地理学に入れるべきか経済科学に入れるべきかという問題、更に「単一的」地理学の是非についての問題につながるのである。しかし、科学はその発展に伴なつて益々様々の分野に別れていくことなどを考えると、「単一的」地理学という部門を創造する方向ではなく、各専門分野の成果を基礎にした共同研究やそのための組織の整備によつて、すなわち科学の発展の方向に沿つて総合的研究を実現すべきではないかと思われるのである。もっとも、各専門分野が「セクト主義」的立場を打ち出したりすると、このような研究の実現は困難になるのであり、この点、組織の確立・整備が大きな問題に

なる。

その他、第四回地理学会大会の決議や科学アカデミー幹部会の決議、あるいはソ連地理学における数学的方法の導入などについても少し紹介しておくべきであろうが、これらについては別の機会にゆずることにした。

(註)

- ① 拙稿、単一的地理学及び経済地理学をめぐって、人文地理一四卷六号、六一～七七頁、昭和三七年。拙稿、ソ連地理学界における一つの問題、名古屋大学文学部研究論集、XXXII、六七～七三頁、一九六四年。
- ② Anuchin, V. : *Istoriya s geographiei (Literaturnaya gazeta, No. 21, 18 Phebralya 1965)*. ヴェ・ア・フヌーチン(一九一三年生)・地理学博士(一九六五年)・モスクワ大学地理学部助教授、地理学の理論的・哲学的諸問題・社会主義国の地誌および経済地理専攻。(Kratkaya geographicheskaya entsiklopediya, Tom 5, Ukazateiinyon, 1966による。以下、人名についての註は、いづれもこの「地理百科辞典」第五巻の「人名索引」の項によった)。
- ③ しばしば「シンデレラ」(Zolushka)と云うのは、継子扱ひでいじめられている「シンデレラ」を意味している。なお、フヌーチンによれば、「地理学はシンデレラだ」という言葉は、一九六四年にモスクワを訪れたユーゴスラビアの地理学者スベトザール・イレシチが言ったものだとしている。
- ④ 「ソヴェト同盟共産党(ボルシェヴィキ)歴史」・小教程・第四章・弁証法的及び史的唯物論について(外国語図書出版所・モスクワ・一九五〇年・一七三～二四頁、特に一九三～一九四頁)参照。
- ⑤ ゲラシーモフが「ソ連邦科学アカデミー通報」(Izvestiya AN SSSR)に発表した「地球についての科学としての地理学」という論文をあげているが、筆者未見。
- ⑥ Armand, D. : *Davaite ne budem* (Lit. gazeta, No. 38, 25 Marta 1965). デ・エリ・アルマンド(一九〇五年生)・地理学博士(一九五七年)・科学アカデミー地理学研究所自然地理学主任教授、専攻は外国の自然地理、自然地理学の理論的諸問題と数量的方法、自然改造、土地評価その他。
- ⑦ Gerasimov, I. : "Ischezla" li geographiya? (Lit. gazeta, No. 52, 29 Apreilya 1965). イ・イ・ゲラシーモフ(一九〇五年生)・科学アカデミー会員、科学アカデミー地理学研究所所長(一九五一年より)、土壌学者・地形学者・自然地理学者。
- ⑧ 第四回大会については「Izvestiya AN SSSR, Seriya geographicheskaya」1964, No. 5, str. 3～29. 科学アカデ

ミー幹部会の決議に「つづは」『Izvestiya AN SSSR, Seriya geogr.』1965, No. 6, str. 102~103, をそれぞれ参照。

- ⑨ Gokhman, V. M., Gornung, M. B., Kovalevskii, V. P.: Ne radi chesti mundira... (Lit. gazeta, No. 60, 20 Maya 1965). ヴェ・エム・ゴフマン (一九一八年生)、『科学アカデミー地理研究先任研究員、合衆国の経済地理、世界経済地理、資源・人口・都市地理研究。エム・ベ・ゴルヌク (一九二六年生)』、地理研究先任研究員、アフリカの地理専攻。ヴェ・ベ・コワレフスキー (一九一七年生)、『地理研究先任研究員、資本主義国、主に合衆国の経済地理研究』。

- ⑩ 十二の部局は次のようなものである。自然地理学、地形学、気候学、水理学、生物地理学、湖沼学、水河学、地図学、地理学史、それにソ連の地理、人民民主主義国の地理、資本主義国の地理である。(Kratkaya geographicheskaya ensiklopediya, Tom 2, 1961, str. 124 以下)。

- ⑪ この提案は、所員の激しい反撃にあつたとしているが、これについては、アヌーチンも前記の論文で、「かつて、研究所の名称そのものからの『地理学』という言葉の追放の試みがおこなわれようとした」と記している。

- ⑫ Zabein, I.: Chto sluchilos' s geografiyei (Lit. gazeta, No. 66, 3 Iyunya 1965). イ・エム・ザベリン (一九二七年生)、『自然地理学者』作家。

ソ連地理学の現状をめぐる議論 (小野)

- ⑬ 「biogenosfera」——生命の発生圏、その領域において、無機物から生命の出現にいたるまで、物質の発展に都合のよい条件が間断なく形成されるところの惑星の外殻。地殻の上層・水圏・対流圏・あらゆる生物を含む。太陽系では地球・火星・金星に存在。月はそれが出現する前段階の水準に達した。「biogenosfera」という術語はザベリンの提唱によるもの (Entsiklopedicheskii slovar, Tom 1, str. 122, 1963 より)。なおア・ア・グリゴリエフ (一八八三年生)、『アカデミー会員、自然地理学の様々の分野における研究がある』。

- ⑭ エス・ヴェニ・カレスニク (一九〇一年生)、『地理学博士 (一九三八年)』、レニングラード大学自然地理学講座主任教授、同大学付属湖沼学研究所々長、ロシア共和国名誉科学者、ソ連邦地理学会々長 (一九六四年より)、『科学アカデミー準会員、水河学および自然地理学者』。

- ⑮ Saushkin, Yu.: Sevodnya i zavtra geografi (Lit. gazeta, No. 71, 17 Iyunya 1965). ユ・ゲ・サウシキン (一九一一年生)、『地理学博士 (一九四六年)』、モスクワ大学地理学部ソ連経済地理学講座主任教授、ソ連の経済地理、経済地理学の理論的問題、経済地域区分、経済地理学史研究。

- ⑯ 「Sovetskaya geografiya, itogi i zadachi」1960, str. 585 によるとモスクワ大学地理学部については、十五の講座が示されている。すなわち、『一般自然地理学、地形学、

ソ連地理学の現状をめぐっての議論(小野)

気候学、陸水学、海洋学、土壌地理学および景観の地化学、生物地理学、ソ連の自然地理学、外国の自然地理学、極地方および氷河学、地図学、地理学史、ソ連の経済地理、人民民主主義国の経済地理、資本主義国の経済地理である。現在もこの十五講座があるが、サウシキンが十四と言っているのは、以上の内の一つを除いているのであろうが、それがどれであるかは不明。

⑰ 誰がどういう意見を寄せてきたかについて、それぞれ具体的に名前があげられているが、ここでは省略する。

⑱ Po povodu geographicheskoi diskussii v "Literaturnoi gazete" (Izvestiya Vsesoyuznovo geographicheskovo obshchestva, 1965, No. 6, str. 501~506). なお、前記サウシキンの論文に続く編集部による一文には、アマーチン

三三四

の見解に反対の意見を寄せてきた人たちの一人にエス・エ・カレスニクの名前があげられている。

⑲ こうした見解は、カレスニクの他の論文にもみられるようである。 Kalesnik, S. V. : Nekotorie itogi novoi diskussii o "edinoi geographii" (Izvestiya Vsesoyuznovo geographicheskovo obshchestva, 1965, No. 3. 特に str. 215~217)。

⑳ たとえば、一九六六年の「モスクワ大学通報・地理学」をみると、第一号(三二~二八頁)にはサウシキンがベ・エリ・グレヴィチと共同で「地理学における数学的方法」という論文を、また第六号(二六~三五頁)には、アマーチンが「数学化と地理的方法」という論文を発表している。